

高千穂神社：本殿

垂仁天皇が紀元前 29 年から紀元 70 年の間に創建したとされる高千穂神社本殿は、後桃園天皇によって 1778 年に再建され、今日の格式高く芸術作品のような建築として形をとどめている。2014 年には重要文化財に指定された。本殿には、流線形の屋根や非対称の切妻造を特徴とする、五間社流造と呼ばれる建築様式が採用されている。五間社流造は、日本の神社で用いられるごく一般的な様式である流造の一種で、三つの内開きの扉と二つの正方格子、五間の桁行からなる。本殿の設計以上に特筆すべきは、国内外の客を魅了してきたその彫刻装飾だ。脇障子の一つには、神武天皇の兄・ミケヌノミコトが、村を襲う荒ぶる神「鬼八」の頭に向けて刀を振るう姿が彫られている。この伝説は、本堂内ではなく神聖な高千穂峡にて見出すことができる。加えて、歴史的かつ審美的に重要な建築の特徴として、手前の切妻に彫られた鳳凰、柱と柱をつなぐ虹やエビなどの小像、カエルの足に見立てた支柱などが挙げられる。これらの建築上の特徴は、徳川幕府における仏教の表現物としては、内観、外観ともに珍しいものだ。さらに、色付けされていない木造の正面部分は、本殿そのものを周囲のスギの木々に溶け込ませる上でこの上ない役割を果たしていると言える。